日本大學 農獣醫學部 校友會々報

発行所
日本大学農獣医学部
校友会
編集発行者
会報発行委員会
印刷所
東京能工KK

校舎の増築

学部長　大森智堪

地下一階、地上四階、総坪数二一一九・三四八坪の第一号館の増築工事が殆んど出来上がかけていることはご承知の通りです。これには地下一階地上二階、総坪数二一八・六八四坪の附属建物も別に付いており、これも着々竣工に向って進捗しています。前者には実習実験室一〇室、講義室一四室、製図室一室、実習準備室一室、教授研究室二五室、中央研究室（各学科共同のもの）一八室が含まれており、後者には研究室五室、臨床実習室二室、獣医科病院が含まれております。

昨年十二月着工したのですから本来ならばもっと早く落成する筈ですが首都圏建築法のいろいろの制約があり再三に渉る設計を重ねたりしなければならなかったために、段々おくれて今日に至っているわけです。

然し、一日も早く学生の役に立てたいと思ったので、講義室だけは後期授業開始と同時に非公式ながら使用しております。

今度の建物はバス通りに面しておりますので、学部の偉容が直ちに一般の目に映じています。校友の各位にも喜んで頂けると思っております。

幾、引続いて第二号館の増築工事も、千余坪の予定で着工の段取りを急いでいます。門を入って直ぐ右の明治薬科大学よりにある木造を取除いてそのあとに建つわけです。土地の活用をあて高層にしたいのですが、これも建築法による制約で地下一階地上二階しか出来ないので閉口していますが、でも、出来ただけ一層立派さを加えるに違いありません。遅くも来年の夏までには竣工させたい積りです。

あとはもう一つ大講堂附設の建物です。二、三年うちには完了したいと思っています。

大学首脳の方々の益々ならぬお力を頂いて着々理想実現に向っていますが、校友各位の一層のご後援も切に願います。

学部祭便り

農獣医学部学生会

今年度の学部祭は我々待望の新校舎の使用も可能となり、学術および文化の展示発表も新校舎落成と相まって、学生一同張切って、その準備に当っております。

昨年度は校舎新築工事のため学内展示もできず、校友諸兄には多大の御迷惑をお掛しましたが、今年度は内容の充実はもちろん、広々と展示することができ、皆様方にも、充分見分して戴き今後の我々の発展のためにも、貴重な御意見御批判を戴けるのではないかと考えている次第です。

主な催し物は左記の通りでございますが、その他にも即売会、バーラー及び模擬展等の趣好をこらしております。

一日　第一回学部長杯争奪学内弁論大会
二日　芸能祭（各種演奏会、落語及び演武会）
三日　講演会（近藤康男）
　　のど自慢大会

各科校友会の動き

農学科分会

就職状況

三月には十八期の学生が社会に巣立って行きましたが本年も昨年同様社会状勢もよく十月五日現在相当数の就職決定者が出ています。その内訳は卒業予定者数三一名のうち開業関係一名、青果会社一名、食品会社一名、化学肥料会社一名、出版会社一名、海外渡航一名、進学一名、教員一名、自営五名の二五名となっております。未だ発表のない一七名の教員等で今年中には大部分が内定または決定出来ると思いますが校友の皆様には今後とも絶大なる御協力を下さるようお願い申上げます。

農学科現状報告

農学科も農業構造の改善に伴い学課内容および設備等に一段と充実を計るべく努力していますが未だ満足した状態に至ってはおりませんが江口主任教授を中心に専心努力しておりますのでこの紙面をお借りして校友の皆様にもよろしく御支援をお願い申上げる次第です。

農学科の教員構成は現在二一名で教授、江口直重、遠藤茂、笠作祥一の各氏に専科学、遺伝学担当として六月より農技研より山崎義人教授が専任としておみえになり現在四名、それに本学出身の助教授師として浦泉務、佐々木弘康、高橋文次郎氏の三名が正に中堅として活躍しております。専任講師として石井貞治、坪木良雄氏の二名、それに新池気親の森原正行、米田和夫助手の二名が学生指導や研究に当っていますがこれら若手教員が後輩の発展および学科の充実を計る上に大いに期待される。

農学科は近代農業に即応すべく昭和三十四年に農学、農工専修を設け出発致しましたがその後農業工学科増設に伴い農工専修の学生は募集しなくなったことは皆様も

食品工学科分会

昨年は赤坂「一条」において総会を行い懇親会はやっておりませんので本年は有意義に過ごしたいと計画致しておりますので是非とも御家族おそろいで大学祭を見がてらお出で下さい。学生の方も統一テーマとして子供が現代社会に生きる意欲と疑問への解明「子供はなぜ、なぜ、って聞くのか」というテーマで皆様に見て戴く様に一生懸命努力をしていますので御覧の上御指導をお願い致します。

永井威三郎・萩原時雄両先生への感謝の集い

前回の会報でお知らせの通り校友の皆様には在学当時からいろいろと御指導頂きました両先生には今春三月をもって教授を停年退職されました。私ども農学科の卒業生にとっては非常に淋しいことと同時に感謝の念で一杯になっております。この意味により日ごろの恩に対し心からお礼を申上げるべく感謝の集いを十一月三日の校友会の総会終了後行いますので校友の皆様の多数参加を希望致します。

新設食品工学科は本年度で第三年次の学生をむかえました。

学生数は二年次　一二二名
　　一年次　一五一名
　　一年次　一七八名

総計四五〇名です。

食品工業は、近代工業の基盤にたって世界的の水準に進展しつつあります。このことは、人類の生活上食品資源利用の合理化ならびに食品産業の発展のため喜ばしいことである。

一例を示せば、「インスタント食品」といわれている即席調理食品、または冷凍食品、缶詰、ビン詰食品、冷凍乾燥食品などが近代生活に欠くべからざる食品となりあるいはまつつ生産されている

その他にも獣医学科を増設しようとしてるる気運があります。

確かに現在農業機構の改善に伴ない獣医師の不足が目立っており、その絶体数が不足しているのはよく解りますが、我々獣医師の将来に思を走らせるならばこの機会に獣医師目らの資格向上を計るべきだと思います。

獣医学科も他の学科と共に大学の方針である教学協同の精神に基き学科課程の改善を着々進めており来るべき新学期を待たずにその一部実施に踏切りました。

そのまま幹は動物別の疾病学を新設した事と専門学を高学年に加え四年間を通して専学を修得させることです。

角笛会

Poultry Disease, Canine-Disease, Ruminology といったアカデミックな単行本も出版されております。

しかし獣医学科は他の学科より修得単位数が多くこれ以上四年間における修得単位数が殖えることは学生の負担も可成りきつくなると思はれ、出来るなら早い時期に獣医学科の修業年限を延長したいものです。既に台湾朝鮮イランあたりの後進国でも修業年限を五年に延引っておりますし、欧米では医学部と同様六年制になっている事等を併せ考えるならば、色々な事情があるとしても大いに考えねばならない事かと思います。

さて昭和三十八年の獣医師国家試験も昨年に引続き九九・五%という高い合格率を維持することが出来ました。来年は二五〇名を越える新卒業生を送出すことになりそうで、東大の三名の卒業生と比較すれば学生諸君の努力は勿論のこと諸先生の苦労の利が忍ばれます。

大学院獣医学研究科も本年は博士課程一名修士課程四名を送り出し新入生は博士課程一名、修士課程七名で現在大学院学生数は博士課程三名修士課程十二名で夫々指導教授のもとで頑張っております

新制度による論文学位も去る三月三名の方に授興されました。その内の二名は角笛会役員で会長の島田幸治（高獣一期）氏と幹事長の佐藤敬（高獣一五期）氏です。ほんとうにお目出度う御座います心からお祝い申上げます。

来る十一月二三日（祭日）には左記の通り恒例の東京獣医畜産学会並びに角笛会総会を母校新校舎で開催致します会員の皆様お誘い合せ御参加下さいますよう御案内申上げます。

記

一、日時十一月二三日（祭日）
1、東京獣医畜産学会自一〇時～至十六時
2、角笛会総会自十六時至十七時
3、懇親会自十七時至十九時三〇分
一、会場母校新校舎（三二四講堂）

来春の日本獣医学会は畜産学会と共に本学が当番校になっておりますので、桜咲く新春には会員諸兄の多数御出席を期待しております。

香気の音づれを聞く季節になりました。大学も前期試験が終り再び始まった後期授業や眼の前に迫った大学祭を控え何やらと忙しくなって参りました。校友の皆さんもお元気で活躍していることと思います。昭和三十八年度は校友会にとっても農学科にとっても並々のうちに過ぎました。ここに皆様と共に未来への希望前進へとスタート致し度く思っております。

総会通知

昭和三十九年度農学校友会総会を十一月二日（文化の日）大学において午後三時より開催することになりましたので同窓の皆様には万障お繰合せの上御出席下さるよう御案内申上げます。なお懇親会を総会終了後大学にて行います。

昨年は赤坂「一条」において総会を行い懇親会はやっておりませんので本年は有意義に過ごしたいと計画致しておりますので是非とも御家族おそろいで大学祭を見がてらお出で下さい。学生の方も統一テーマとして子供が現代社会に生きる意欲と疑問への解明「子供はなぜ、なぜ、って聞くのか」というテーマで皆様に見て戴く様に一生懸命努力をしていますので御覧の上御指導をお願い致します。

永井威三郎・萩原時雄両先生への感謝の集い

前回の会報でお知らせの通り校友の皆様には在学当時からいろいろと御指導頂きました両先生には今春三月をもって教授を停年退職されました。私ども農学科の卒業生にとっては非常に淋しいことと同時に感謝の念で一杯になっております。この意味により日ごろの恩に対し心からお礼を申上げるべく感謝の集いを十一月三日の校友の総会終了後行いますので校友の皆様の多数参加を希望致します。

農学科分会

就職状況

三月には十八期の学生が社会に巣立って行きましたが本年も昨年同様社会状勢もよく十月五日現在相当数の就職決定者が出ています。その内訳は卒業予定者数三一名のうち開業関係一名、青果会社一名、食品会社一名、化学肥料会社一名、出版会社一名、海外渡航一名、進学一名、教員一名、自営五名の二五名となっております。未だ発表のない一七名の教員等で今年中には大部分が内定または決定出来ると思いますが校友の皆様には今後とも絶大なる御協力を下さるようお願い申上げます。

農学科現状報告

農学科も農業構造の改善に伴い学課内容および設備等に一段と充実を計るべく努力していますが未だ満足した状態に至ってはおりませんが江口主任教授を中心に専心努力しておりますのでこの紙面をお借りして校友の皆様にもよろしく御支援をお願い申上げる次第です。

農学科の教員構成は現在二一名として教授、江口直重、遠藤茂、笠作祥一の各氏に専科学、遺伝学担当として六月より農技研より山崎義人教授が専任としておみえになり現在四名、それに本学出身の助教授師として浦泉務、佐々木弘康、高橋文次郎氏の三名が正に中堅として活躍しております。専任講師として石井貞治、坪木良雄氏の二名、それに新池気親の森原正行、米田和夫助手の二名が学生指導や研究に当っていますがこれら若手教員が後輩の発展および学科の充実を計る上に大いに期待される。

農学科は近代農業に即応すべく昭和三十四年に農学、農工専修を設け出発致しましたがその後農業工学科増設に伴い農工専修の学生は募集しなくなったことは皆様も

食品工学科分会

原料貯蔵、汚水処理、熱管理、食品販売に至るまで、系統的にこの方面の近代工業の学問と技術を教育研究する計画です。

ゆえに、本学科の卒業生は、食品工学の専門技術者として、食品工業の機械器具の設計製作、操作

設計製作された物を用いている次第である。

したがって本学科においては、食品製造学を一般にわたり培養、水産、農産の各食品の製造を工業化学的な見地から教育研究し、これに、食品製造のための機械工学、化学工学、機器測定学、工場管理

ならびに食品製造に関する各種方面に進出するとともに、研究教育行政などの方面に進出し得る人物を養成しております。

教育学科目並びに教育陣は次の通りであります。化学工学（八田四郎）次、唯野哲男）機械工学（小川清）電気工学（宮川一郎）機械計測学（野沢典之）食品製造工学（斉藤義蔵、百理信一）、唯野哲男）蒸米英男、小林誠一、清水良）食品化学（蒲木英男）冷凍工学（百理信一）冷凍食品学（百理信一）缶詰工学（横田正生）品質管理論包装論、食品衛生学（松井武夫）食品微生物学（大熊敏一）有機化学（佐藤寿）物理化学（唯野哲男、佐藤寿）分析化学（塩谷則雄）生物化学（食品次郎）食品工学演習（百野信一）卒業論文、レオロジー、水質水量検査論、汚物及び廃水処理論、食品市場論、応用醗学（浅野信司）栄養化学（中島銀三）特別講義及びこれらの科目に関連した実験実習等を広範囲にわたる学科目を教育指導しております。

教育陣においては、特に、化学工学界の最高権威者である八田四郎次博士を顧問格として、学科主任には斉藤義蔵教授を始め、各界の権威ある諸先生数十名のもとに常日頃止むことなく前進しております。

各科校友会の動き

桜水会

一、水産学科の教員と学生数

昭和三十九年度より清水　亨教授（元京都大学教授、水産製造学）と橋井森三郎教授（元水産大学教授、漁業学）の御二方を新に迎え、塚谷・川本両教授を加えて四名となる。清水教授は人も知る練製品の大家であり、橋井教授はかって水産学科の横須賀時代に漁業学と運用航海術を講義され、一期と二期の卒業生には親しみの先生である。両教授は業界にも非常に広く通暁されており、その種威ある講義内容と学生の就職に又学外実習等の御指導面等において今後の水産学科発展に寄与する処大であろう。

助教授にあっては、本学出身の出口・門田両氏が助教授に昇進した。更に出口助教授は本年六月、京都大学より農学博士の学位記を授与された。ここに出口助教授は水産学科出身者として博士号を得た最初の人となられわけである。これは桜水会としても非常に嬉しい事であって、ここに謹賀の祝意を表すると共に、更に今後の御発展を祈るものである。

その他に二八人年度卒業の小橋二夫君（水産増殖学専攻）が副手に採用され、川本教授の指導のもとに臨海実験所に勤務している。

以上専任教員の現在数は教授四名、助教授二名、専任講師二名、副手三名、合計一二名となっている。

一方学生数においては一年次八九名、二年次一〇四名、三年次一四〇名、四年次一二二名合計四五七名である。

一、横須賀臨海実験所の近況

実験所地先を含む横須賀市馬堀海岸は本年秋から二十万坪を埋立てられる運命にある。海岸弘立後は実験所としての機能が著しく阻害されるので、現在実験所勤務を兼ねている鈴田専任講師が中心となって伊豆・房総方面に馬堀に代るべき適地に物色中である。校友諸兄にも適当な候補地としておお当りがあるならばお知らせ願えれば幸甚です。

一、新卒業生の就職と大学

今年度卒業予定者は一二名であるが、例年よりその出足は好調で、すでに決定しれもの、内定しているものの合せて過半数に達している。年度内には全員決定するものと思われるが、更に先輩諸兄の斡旋方御協力をお願いしたい。

主な就職先は宝幸水産、伊藤ハム宝製食品、全薬工業、武州食品三崎加工前料、東海産物、神田物産、中京コカコーラ、東京コカコーラ、坂田真珠、東洋製缶、帝国食品、キューピー、高砂香料、日本鉛筆工業、船橋食品（以下順不同）等の他、二一三の地方公務員や陸上自衛隊幹部候補生等がある。

尚、就職問題も大事であるが、今後の水産学科発展のためには更に優秀な後輩をより多く養成する必要がある。この点学内では桜命会員の言動御元気ですか？　月日の流れは早いもので農業工学校友会が発会してから早や三年目を迎え会員数も一三〇名を数えております。

発足当初のあわただしさのため会員諸兄に大変面倒をおかけしましたが、三年目にしてやっと地に足がついた感がしてきました。

昭和三九年三月卒業の第一回生より柏谷八義君、戸崎紘一君、河野昌弘君の三名を幹事として迎え、そのうち戸崎紘一君が地事に選出されました。

学部の方も大変なかわりようで農業の新館が出来上がり後期の授業が行なわれております。農業工学科関係の各研究室を新館に入館する日が真近い事でしょう。

現在四年生の第一回卒業予定者約五〇名ですが就職決定したものはまだ半数にすぎません。会員諸兄には平素何かと御多用中とは存じますが後輩のため就職斡旋を願えれば幸いと存じておりますので

農業工学科分会

その向きの方は学部学生課または農業工学科まで御一報下さるようお願いします。

昭和39年度の総会及び懇親会は一一月二日に行なわれることになりましたので会員諸兄の多数の御出席をお待ちいたしております。

医学部祭も一一月一日、二日、三日の三日間行われ学生の展示も農業土木学と農業機械学の両部門に分かれて日頃研究の成果を展示しています。総会はこの学部祭中の最後の日「一一月三日」ですが午後二時から学部で行い懇親会は午後五時より学外で行う予定になって居ります。この総会および懇親会の案内につきましては別に案内状を発送してありますから幹事田欠の御返事を御待ちしています。

さて次に訃報ですが、農業工学科三年次学生白石昇君が農林省出水平拓建設事務所（鹿児島県出水市下知識）にて夏季実習に従事しており干拓地の探浅測量実習中不慮の難にあって死亡致しました。

すでに前号でお知らせしたように大学院関係を除き、中島蹟三、西川英次郎、岩田武司三先生の退任と桜井芳人（栄養化学）、木原芳次郎（食品化学、農産利用学）、三井進午（肥料及植物栄養学）三先生の就任という本学科としては今までにない大きな動をこの春経験した。ところで主任教授森高次郎先生は六月以来やや高血圧気味で静養中であったが夏休後も暫時的に大村牧先生が代行されている。もちろん講義には出講されている。その他の先生方はそれぞれにお元気で活躍されている。

新校舎は一部完成すでに使用中であるが本学科としては醗酵学研究室を二分し、醗酵化学（宮岡教授）、有用微生物学（浅野助教授）とし、宮岡先生の研究室を新校舎に増設することになった。従って今秋より研究室は土壌学、肥料及植物栄養学、生物化学、食品栄養化学、農産利用学と新二研究室の七研究室の陣容でゆくことになる。なお四月より本学科の助手として山本一康君が採用され土壌学研究室に配属された。同君は農芸化学科二期生であり、去る三月大学院修士課程を卒業された元気一杯の前途有望の好青年である。

本年度の農芸化学科新入生は全国的な受験生減少の年のためその影響もあって七十五名程度である。現在四年生は約四名おり目下就職運動に全学科をあげて努力している。今年は神正宗、神正宗、北の雪といった清酒業界へ三名決定した他製パン、製菓関係に多くの内定をみた。現在約六五～七〇名の線まで決定をみたが求人は多くあるが学生側でやや選り好みのみをしている状態で決定が遅れているが卒業までには殆ど決定は間違いない。

ところで農学系大学は国公私立を問わず現在休講改善の大問題を抱えてそれぞれに苦慮しているところである。わが農芸化学科はその中でも第一次卒業に直結する学科であり、かなり恵まれた立場にあるが学問、技術の進歩が日新月歩の現代では一時として安閑としてはいられない。新しい時代に即応した魅力ある農芸化学科の開発に努力している。特に同じ学部に設置された食品工学科とのつり合いをはかるようにもってゆくよう考慮している。本学科では生物化学、有機化学などの基礎学問の上に主として食品を対象として、その独自の技術といえる醗酵、微生物方面を強化した新しい線を考えている。醗酵関係の研究室増設はこの方針の一つのあらわれである。

その意味で桜友会としては去る七月二十八日に緊急の幹事会を開き、本学科の正しい認識のためのPR特集号を桜友会だよりの一環として発行した。すでに会員諸兄の手にお届けしましたがその意味で今後一層の御協力を母校のためにお願致します。

その後の桜友会関係の報告事項を記すと、五月二十二日の幹事会で中島、西川、岩田の退任三先生に記念品を贈呈することが決議され、後日桜会会長より記念品七宝焼花びんを三先生にお届けしました。

現在会員数約七百二十名であり年数回の連絡事務もなかなか大仕事になって来ました。事務局としては今後の会員数の増加を見込み、事務の機械化（？）能率化を考えています。一方、毎回の連絡に約二五％は宛先不明で郵便物が戻って来ています。従って転居、転職、転勤、改姓などの際にはお手数ながら必ず事務局宛御連絡下さい。今後このような情報不明の方には一切連絡が出来なくなりますから御注意下さい。

桜友会

オリンピックを控えて何かあわただしい東京の空気ですが…。

前期試験も終了、熱田教授のお供をして、二年生四十余名をつれ木曽をまわってきました。御岳山の麓、王滝もすっかりかわって、昔、小林旅館のあった辺は大きなダムになりました。二日間、すっかり雨にたたられましたが、かって苦労とまわった道を林鉄で、ことことまわってきました。

さて、林学科は熱田主任教授が学生指導委員長になられましたので大変忙しく夜七時までも八時でも頑張っておられます。熱田教授（経営）斉藤教授（木材理学）中村教授（木材化学）がこれを助けて、おのおの立場で頑張っていて下さいます。

先輩諸賢になじみ深い恩師方は三浦、太田、明永、杉浦、中島、諸先生はみな元気に出講しておられますし、又、土屋先生は相変らず卒業生の就職のために、今年も異状な努力を続けていて下さいます。

林学科分会

昔年で鈴木先生が名古屋に転出なさったことは前便でお知らせしましたが相変らず、むこうで異才ぶりを発揮している模様です。

先輩諸賢、どうか名古屋をお通りの節は是非途中下車して旧交を暖め、先生を激励し又激励されて来て下さい。その時は「日大林学科、第○期卒業、何某」でありますが、ということを忘れぬように願います。

これは何も鈴木先生ばかりでなく、よく尋ねて来られた卒業生の顔は覚えていても名前の思い出せぬことが多いので、名先生方に会った時、こういうのが礼儀ではないかと思います。

佐々木先生は御夏学実習でとびまわり、中岡先生はブナ林の研究であちこちし、ともすれば空き勝い林学科の研究室を今年、残った塩沢君が守っていてくれます。どうか長い目で彼の前途を見守り、応援して頂きたいと思います。

卒業生も六百余名となり大分大きな校友会となりました。

在校生は一五〇名程、昔の諸君にくらべると余程まじめによく出席して勉強しています。いままで工事のため林学科の研究室はせまい所におし込められていましたが今度、本館の四階の大部分が研究室、実験室として当てられます。というのはいよいよ新館が拡張されました。

日大、農獣医学部からものすごい拡張発展をしている時に、林学科だけぼちぼちとり残されているわけに参りません。

卒業生諸賢の絶大なる応援のもとに一大飛躍をせねばならぬ時期であると思います。

こういう意味で是非知人友人の息子さん達をすすめて林学科におくって下さい。

それと共に物質的にも精神的にも名実共に諸賢の御努力をお願いする次第です。（加藤記）

紫友会

今春、猛風のため、横浜警友病院に入院、十月十日に退院されましたが、まだ御通院中です。米寿は六十五才になられますが現代ではまだまだ盛んな年代と云えることです。すし金学科元気に回復されることを御待ちしています

○学科課程の体質改善

斉藤教授の興隆にともない農学協議会、農産製造、農産生産、畜産製造などのそれぞれの分野について、より高度の専門知識を与える教育を行い得るよう検討中でこれが実現すれば従来の他大学畜産科に例を見ない新鮮な学科内容をもったものに脱皮することになります。

○就職は非常に好調で熊川助教授が級担任として一生懸命に骨折ってをられますが七月に関係各社からの担当者の出校を求め求人側のそれぞれの分野の説明会を開き十月現在明年度卒業予定者約九十名が殆んど決定しています。職種は前年と同じく飼料製造、食肉加工乳加工の関係の会社が主です

○後輩のオリンピックが始まりましたがブラジル水泳選手団のコーチとして新制一期（昭和二十六年三月）卒の真木昌男が十三年ぶりに帰日しました。日大水泳部が世界に名をあげた古橋、橋爪選手等を指導していたときの主将で当時の水泳短距離分の主将としてとくに六会時代の校友にとってはなつかしい人です。

現在ブラジルで水泳コーチのかたわら選手の体調をととのえるための長年の研究による指圧療法やマッサージを活用しての方面で大繁盛しているそうです　十月十五日帰日します、相変らず大自玉で元気一杯老長男の業だと称してガーナの実をほりほりたべていました。同期の関山君も牧場を経営して元気でいる由です。

（文責　佐々木　実）